

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 13 集

2022（令和4）年度

東京神学大学

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号、平成 25 年 4 月 1 日改正施行）第 8 条による電子公表と併せ、2022 年度に本学に於いて博士の学位を授与した者の論文の内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録し、印刷公表に供するものである。

氏 名： 田中 従子（東京都）

学位の種類： 博士（神学）

学位記番号： 乙第11号

学位授与の要件： 学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第2項

学位授与の日付： 2022年5月31日

学位論文題目： 「ナジアンゾスのグレゴリオスにおける聖霊論の基盤と展開の研究」

審査委員会： 主査 東京神学大学特任教授 棚村 重行

副査 東京神学大学常勤講師 本城 仰太

副査 東京神学大学教授 須田 拓

内容の要旨

ナジアンゾスのグレゴリオスにおける聖霊論の基盤と展開の研究（要約）

田中従子

ナジアンゾスのグレゴリオスの知名度は、日本において高いとは言い難い状況は否めないのであろう。しかし、同時期に活躍し、グレゴリオスよりも広く認知されているバシレイオスと比べても、グレゴリオスの歴史的意義は少しも劣るものではない。ことに聖霊論の分野においては、グレゴリオスの神学はバシレイオスのそれと比較しても、より明確にニカイアの信仰を表明するものとなっているのである。グレゴリオスの時代においては、聖霊を御父とホモウシオスであると明言することは、非伝統的であると攻撃されることも多々あったのであるが、それにも関わらず聖霊の御父との同質性と神性を躊躇なく説いたのは、バシレイオスではなくグレゴリオスだったのである。従って、ニカイアの信仰を受け継ぐ今日の正統的な教会において、グレゴリオスの聖霊論は研究に値するものなのである。

そこで本論文は、グレゴリオスの揺るぎない聖霊の神性への確信の源を明らかにすることを目的とする。その際、グレゴリオスの独自性を明確にするために、彼の神学的アプローチをバシレイオスのそれと比較するものである。ただし両者は、古代教父に広く共通するように、それぞれ自らの議論を丁寧に聖書テキストに基づいて展開している点においては同じアプローチをとっている。しかし、教会が聖霊論を厳密に議論し始めた際に、聖書解釈を中心に据えた神学議論にある問題が生じたのである。つまり、ニカイアの信仰としては聖霊の神性が主張されるべきであったが、しかし聖書の中には、御父が神であるのと同じ意味で聖霊が神であると明確に示す箇所が存在しないのである。そのような当時の状況に鑑みて、グレゴリオスとバシレイオスの聖霊論を扱う本研究においても、一旦は彼らの直接的な聖書解釈という文脈から離れ、より広い視野をもって彼らの神理解や啓示理解について考察することとする。そして、本論文ではそのような諸理解を前提とした上で、それぞれの教父がどのように「聖書」を理解していたかに立ち戻ってそれを読み解くこととする。そのようにして、最終的にはグレゴリオスの聖霊論の「基盤」と「展開」を整理して提示するものとする。

従って、本論文の究極的な目的は、グレゴリオスが彼の啓示理解の中で聖書をどのような位置づけたのかを探り、そのような聖書理解がいかにか、彼が自らの非伝統的と思われた聖霊論を聖書的であると確信するに至らしめたのかを論じることである。従って本論文に

においては、グレゴリオスの確固たる聖霊論が、一部の研究者が論じるようにバシレイオスの聖霊論を雄弁に語り直しただけのものではないことを明らかにしたい。むしろグレゴリオスの聖霊論は、彼自身の神知識の理解と啓示理解、そしてそれらの理解を背景とした聖書解釈から生み出されたものであり、本論文はそのことの論証を試みるものなのである。それでは以下に、本論文の要約を章ごとに記すこととする。

はじめに、日本ではその存在が決して目立ったものではないグレゴリオスの生涯を紹介するが、そのためには彼が生きた時代の教会的な背景を描き出すことが不可欠である。従って、第一部（1~5章）はグレゴリオスの生涯とその時代を紹介する内容になっており、グレゴリオス神学の背景を描写するものである。第1章においては、318年に端を発するアレイオス論争の通史に簡単に触れる。そして第2章においてグレゴリオスの生涯を紹介するが、そこでは彼とバシレイオスの友情の深さと同時に、彼らの神学的差異が明らかにされる。ここでは特に、バシレイオスがいかなる状況下においても聖霊が御父とホモウシオスであると明言しなかったのに対して、グレゴリオスは聖霊の神性を断言したことが重要である。加えて、彼らの人生を一次史料を通して垣間見ることで、彼らの性格の差というものも注目するものである。何故なら、人の性格や思考の傾向は本人が意識する以上にその神学に影響を及ぼしているからである。そして、グレゴリオスの生涯を概観した後に、彼の膨大な著作の中から、本論文において重要である幾つかの著作の時代背景や内容を第3章で紹介することとする。

以上のことを踏まえた上で、第4章においてアレイオス論争研究史を R. Williams の分析に沿って紹介する。アレイオス論争の概要を理解した上で研究史に触れた方が、研究史の内容を理解し易いと思われる上に、アレイオス論争の大まかな歴史的経緯自体についてはある程度コンセンサスが存在すると考えられるので、研究史を最初に位置づける一般的な方法に反してこのような順序にしているのであるが、これはナジアンゾスのグレゴリオス研究に関しても同じことであるので、第2章でグレゴリオスの生涯について予め論じたうえで、第5章でグレゴリオス研究史の紹介をしている。グレゴリオスの研究史の潮流も、アレイオス論争の研究史のその内に位置づけられるものだからである。また、第4章においては、アレイオス論争研究史の中で特に Williams と Vaggione の研究に注目し、本研究も先入観によってではなく一次史料に語らしめるといふ彼らの研究のスタンスを踏襲するものであることを論じている。また、グレゴリオスの研究史という観点からは、本研究も最近の「グレゴリオスの再評価」の潮流に乗って、彼の神学をポジティブな視点から研

究するものであることを表明するものである。

以上、第一部のことがらを踏まえて、第二部（6~9章）においては神知識について論じることとする。グレゴリオスが、聖霊が「神」であると明言していたことは既に述べたが、そもそも聖霊が神であるか否かという、神の本質に関わる知識を人がどのようにして得るのかを論じなければならないのである。しかもその際に、そもそもグレゴリオスやバシレイオスにとって「神 [Θεός]」という語が厳密に何を意味していたかを明らかにしなければならない。従って、第6章においては、グレゴリオスとバシレイオスのそれぞれの Θεός 理解を論じ、バシレイオスとグレゴリオスは両者ともに「神」を世界の「第一原因」と捉えていたが、グレゴリオスはその第一原因を三位一体の神として理解していたのに対して、バシレイオスはそれを御父にのみ当てはまることとして理解していたことが明らかにされる。その上で、7章において神知識について論じるが、そこで明らかになることは、グレゴリオスとバシレイオスは「神は存在する (that God is)」という神知識と、「神とは何であるか (what God is)」という神知識を明確に区別し、後者については、その知識に論理のみで到達することは不可能であると考えていたことである。それ故に、第8章においては、「神とは何であるか」を知る手立てとして、バシレイオスは教会の伝統を挙げ、グレゴリオスは神化の理論を展開したことについて論じる。そして神化に関する議論は、第9章においてさらに詳しく論じられ、グレゴリオスにおいては救済論と認識論が分かちがたく関係していることが明らかにされる。

第三部（10~12章）は神の啓示理解について論じるが、第10章は神知識が可能となる大前提として、神が自らを啓示する神のイニシアティブをグレゴリオスもバシレイオスも念頭に置くことを示している。そして第11章においては、バシレイオスにとってその啓示は聖書と教会の伝統として捉えられており、両者はその起源を同じくしているが故に矛盾しないが、互いに依存することなく独立した権威を有していると解されていることが論じられる。転じて第12章においては、グレゴリオスにとって啓示とは段階的なものであり、神との人格的な交わりの上に成り立っていることが論じられる。また、啓示は個人のレベルにおいては神化のプロセスとして体験され、共同体のレベルにおいては啓示の発展のプロセスとして体験されることが示される。そして、その啓示の発展の概念は、グレゴリオスに特有のものとして理解されがちであるが、この概念が正しく理解される必要があるので、第四部においてその問題が取り上げられる。

第四部（13~16章）は、二人の教父における聖書と三一論の関係について論じるもので

ある。そこでまず第 13 章においては、当時の聖霊論論争において問題であったのは、聖書が聖霊の神性について沈黙していることであったことが示される。その上で、グレゴリオスとバシレイオスがどのように聖書とそれぞれの聖霊論の関係を論じたかを考察したいが、その前に、そもそも彼らにとって「聖書」とはどのようなものであったかを第 14 章で論じることとする。現代的な感覚で「聖書」を理解しては、教父たちの発言の真意を得ることはできないために、歴史的な文脈に「聖書」を位置づけ、当時の「聖書」理解に少しでも触れることが必要なのである。そして、第 14 章の議論を踏まえて、第 15 章ではバシレイオスが聖霊の神性についての聖書の沈黙を、「教説」と「宣教」を区別し、教会の教えの一部は伝統的に隠されていたと説明していること、そしてその上で聖書の曖昧な言明と教会の秘密の伝統に依拠しつつ、聖霊が「神的」であるという結論に至ったことを論じる。それに対して第 16 章では、グレゴリオスが、聖霊の神性は聖書が明確に証言するものであるとし、聖霊の神性が彼の時代に至るまで明言されなかった事実を啓示の発展の概念によって説明することで、聖霊が神であるという結論に至ったことを論じることとする。その際注目すべきは、グレゴリオスにおけるアタナシオスとの類似点である。多くの研究者がグレゴリオスにおけるオリゲネスの影響を強く指摘する一方で、アタナシオスとの共通点は近年否定されがちである。しかし、グレゴリオスの啓示の発展の思想から見えてくるものは、やはりグレゴリオスがアタナシオスから引き継いだニカイアのスピリットなのである。

以上の議論を踏まえ、第五部（17~18 章）は結論として、グレゴリオスの聖霊論はバシレイオスのそれをただ雄弁に語り直したただけのものではなく、しっかりとグレゴリオス自身の神知識理解、啓示理解に基づいたものであることを第 17 章で論じる。ここでは具体的に以下の 7 つの点がグレゴリオスの聖霊論を生み出した土壌として指摘される。1) グレゴリオスにとっての「神」とは三位一体の神である。2) グレゴリオスは神について知り、語ることに否定的ではなかった。3) グレゴリオスは神の啓示を段階的なものとして捉えていた。4) グレゴリオスは聖書の沈黙を説明するために啓示の発展の理論を用いる。5) グレゴリオスは聖書が聖霊の神性を明言していると確信している。6) 聖書の十全性への信頼はアタナシオスから引き継がれたニカイアの遺産である。7) グレゴリオスは巧みに包括的な神学を構築した。

そして第 18 章においては、グレゴリオスに見られるニカイア正統主義の勝利の今日的意義と、現代における「教会的」聖書釈義の必要性とについて論考する。教会の歴史の研

究は、ただ過去を興味深く眺めることに留まっていたには意味がない。「聖なる公同の教会」への信仰を告白する者であれば、教会が時代も地理も超えて一つであることをも信じるものであり、そうであるならば、三一論の形成において非常に重要かつ規範的な意味を持つ教父時代の聖書釈義が、直接今日の聖書理解、聖書釈義にも意味を持つはずである。それ故にこの章では、特に「聖書のみ」を掲げるプロテスタント教会に対して、グレゴリオスが直面し、懸命に取り組んだ聖霊論論争の展開と終結がどのような意義を持つかを論じるものであり、具体的には、教会の信仰の伝統の中に身を置きつつ聖書の十全性への信頼を回復することを提唱して本論文は終えられている。

審査結果の要旨

博士論文審査要旨

棚村重行

本審査要旨は、田中従子氏が東京神学大学院学位「博士（神学）」の請求のために提出した論文の審査報告である。その学位請求論文は、A4 サイズで 218 頁に及び、それに加えて 12 頁の文献表を付け、合計 230 頁の作品である。論文名は『ナジアンゾスのグレゴリオスにおける聖霊論の基盤と展開の研究』であり、東京神学大学に提出され、2021 年 3 月 17 日に受理された。

この田中氏の博士論文は、従来他の歴史神学担当教師の指導の下で長年研究が進められ最近完成を見た。だが同指導教師の退職に伴い、従来のような論文指導者が主査を務め、同時に報告執筆者を兼ねる審査委員会組織構成は不可能となった。そこで、今年度東京神学大学教授会は田中氏の論文審査に当たり、以下の三名の授業担当中の現任神学教師による論文審査委員会を発足させた。そのメンバーは、棚村重行東京神学大学特任教授（主査）、本城仰太東京神学大学常勤講師（副査 1）、須田拓東京神学大学教授（副査 2）である。発足後、本委員会は今回の審査に当たっては、以下の三者の分業体制をもって論文審査に臨むこととした。棚村は論文審査委員会において主査、及び当該論文の特に論文構成批判と報告書執筆を担当する。また副査 1 の本城氏は古代教会史の専門性を踏まえて田中論文に関する歴史神学的批判を行い、副査 2 の須田氏は組織神学の専門性を生かし論文の神学的内容批判を担う「三分業」を行うこととした。

その上で、本審査委員会は、2021 年 12 月 8 日(水)午後 2 時 30 分から 5 時過ぎまで、東京神学大学新会議室において田中氏の出席のもとで、提出された論文の審査を行った。審査の結果、委員の間では様々なコメントや批評はありながらも、本学位請求論文は学術的な水準に到達した論文であることを一致して認め、審査委員会は合議の上、合格点を与えた。

本博士論文の目的、その概要と構成

著者田中氏の研究目的は、本論文第一部の記述によれば以下の通りである。我が国の古代ギリシャ教父学研究者らにより本格的な研究が蓄積されてこなかった事態に鑑み、ナジアンゾスのグレゴリオスの「揺ぎない聖霊の神性への確信の源をさぐる」ため、「彼の神学的アプローチを〔カエサリアの〕バシレイオスのそれと比較」する基本目的が設定された（田中論文、「本研究の概要」、8 頁）。評者流に言い換えれば、研究対象のいわば「主役」教父グレゴリオスの神学思想を「主たる脇役」バシレイオスのそれと対比し、前者の神学的な特質を解明することを目指すのである。そのために田中氏は、本論文の「第一部 グレゴリオスの生涯とその時代」で、この人物の伝記的側面を描き、本研究の展開にとって重要な諸事件や神学資料を紹介する。先ず第 1 章では、318 年に遡るア

タナシオスとアレイオスの論争勃発、続く論争の本格化、危機、ニカイア派の団結を経てニカイア派の勝利とその後の経過を描く(「第1章 アレイオス論争通史」、13-26頁)。次章では、グレゴリオスとバシレイオスとの出会いの経過を描き、前者が聖霊の神性を確信していたのに対し、後者は聖霊が御父と同質であることを明言しなかったことを指摘する(「第2章 グレゴリオスの生涯」、26-43頁)。第3章で、田中氏はグレゴリオス研究の資料とする作品を神学講話、教会で語られた講話、書簡、「わが生涯」なる詩などに分類し解説を施す(「第3章 グレゴリオスの著作」、44-53頁)。続く第4章で田中氏は長い研究史をひも解き、特に現代の歴史家ウィリアムズやヴァジオーネの新しい研究に即し彼らの諸解釈を取り上げる(「第4章 アレイオス論争研究史」、53-77頁)。第5章ではグレゴリオスに関する1990年代前後までの内外の研究を概観し、「グレゴリオスの聖書と三位一体論」なる主題こそ本研究の中心だと予告する(「第5章 ナジアンゾスのグレゴリオス研究史」、77-88頁)。ここで振り返れば、この第一部に筆者が割いた頁数はなんと75頁に及ぶ。この分量は文献表を除く218頁の論考全体の34パーセント、本文の約三分の一強を占める。この「第一部」が論じたいささか雑多な配列のトピックス、他の「部」と異なる多くの頁の配分が後の論考の展開や構成に及ぼす短所に関しては、「本博士論文の問題点と評価ないし改善点」中で是非を論じたい。

さて続く「第二部 神知識」(論文89-131頁、頁総数は42頁、本文内比率19パーセント強)では、最大の争点の一つ、両神学者の「神知識」論の比較分析へ移行する。先ず第6章で、グレゴリオスもバシレイオスも共に神を「第一原因」としたとする。だが、前者はその神を「三位一体の神」、後者は第一原因が「御父のみ」と見る点、大きな相違が存在した(「第6章 セオス(神)の定義」、89-106頁)。次に第7章で田中氏は、二人の神学を「否定神学」と括ることに反対した(「第7章 二つの神知識」、106-112頁)。第8章で、田中氏は二つの神知識の出現は両者の神学的相違に起因するとした。一方でグレゴリオスは「神の知識の習得は段階的に捉える」ものとし、バシレイオスは神の「知識とは過去から伝承されたものを受け取る」ものとした。だからこそ前者に重大な「神化」の思想は、後者にはその重要性が減少する(「第8章 神の知識の可能性」、112-119頁)。それ故に第9章はこう結ぶ、バシレイオスは考えた、神知識は教会に与えられ、「人々は教会を通して神を知る」。だがグレゴリオスはそれとは異なり熟慮した：「より動的な終末論」に立つ「神化」を通し「神知識の可能性」が人に付与される(「第9章 神知識と救済」、119-131頁)。この神知識問題で又しても、両者の神学的相違は小さくはない。

続く「第三部 神の啓示」(論文132-164頁、頁総数は32頁、本文比率15パーセント弱)では、二人の「神知識」論が二つの異なる「神の啓示」論にどう導いたか、その論証に移行する。第10章で、最初には両者が共に神の自己啓示の先行を認めている事実が再確認される(「第10章 神のイニシアティブ」、132-135頁)。ところが、グレゴリオスは「人格的な交わり」に導く「神の啓示」の主導権を、バシレイオスは「神知識」に至らせる「教え」の大切さを重視した。そのために両者の神学的相違が際立った。第11章でその実例を取り上げる：バシレイオスは「聖書と伝統」の起源では両者は同一の

啓示的真理で開始され、以後「聖書」と「伝統」の二権威に分けられた（「二源泉理論」と（第 11 章 バシレイオスと教会の伝統」、135-148 頁）。反対に、グレゴリオスの見方は相違した：啓示とは神との人格的交わりに他ならず、段階を踏んで人に伝達されたもの。だから彼は主張する、啓示とは二つの道を通るもの：個人では「神化」の歩み（純化→照明→神化）で導かれ、教会共同体的には「啓示の発展」により人々は正しく導かれると（第 12 章 グレゴリオスにおける神との生ける交わり」、148-164 頁）。

それならば、この「神知識」を齎す「神の啓示」は、その啓示の源泉である「聖書」（正典）と「三一の神」自身にどう関係するのか。論者によれば、この問いが「第四部 聖書と三一の神」（論文 165-211 頁、頁総数は 46 頁、本文比率 21%強）の中心問題だ。なぜならば、当時の東方教会は第 13 章で指摘する聖書の「聖霊の神性に関する沈黙」問題に直面したからだ。では問おう、二人の神学的思惟はこの沈黙にどうしたか？ 答え：「バシレイオスは教会の秘密の伝統」で応答し、「グレゴリオスは神化と啓示の発展の理論」により「聖書の沈黙」問題に答えた（第 13 章 聖書の沈黙」、165-169 頁）。それならばと論者は第 14 章で改めて問いを出す、「両教父により聖書はどう理解されたのか」と（第 14 章 グレゴリオスとバシレイオスにとっての聖書」、169-175 頁）。バシレイオスは 15 章でこう解答する：「聖霊の神性」は教会の教えの明確な「宣教」と違い、隠され継承されてきた「教説」に他ならぬ（第 15 章 バシレイオスと神の神的霊」、175-181 頁）。反対にグレゴリオスは 16 章でこう切り返す：「聖書の十全性」理論に堅く立ち、聖書が明瞭に聖霊の神性を証言していると。だがその神性が彼の時代まで明言されなかった理由は何故かと論敵は問う。彼は鋭く反論する、「啓示の発展の概念」でその秘密は説明可能だと（第 16 章 グレゴリオスと聖霊なる神」、182-211 頁、特に 211 頁）。田中氏はこの「啓示の発展」理論を「ニカイアのスピリットの共有」と呼び、彼とアタナシオスの神学的な近さを強調する（202-4 頁）。興味深い指摘に他ならない。

以上四部からなる本博士論文は、「第五部 結論」における「第 17 章 結論」、第 18 章 グレゴリオスの聖霊論からの問いかけ」（論文 212-218 頁、頁総数は 6 頁、本文比率は 3 パーセント弱）で論考は結論に辿り着く。最後に田中氏の結語の要点を紹介し締めくくる（以下の①、②の挿入と「…」は棚村の責任による省略部分）：①論文の狙い：「本論文では、まずグレゴリオスとバシレイオスの三一論、特に聖霊論の違いが明らかにされた。…バシレイオスは聖霊が『神的』であるとしか述べなかったのに対して、グレゴリオスは聖霊が『神』であり、御父とホモウシオスであることを明言した…。」；②その神学相違点：「…グレゴリオスの聖霊論はバシレイオスのそれをより鮮明に語り直しただけ…ではなく、彼らの聖霊論の違いは、それぞれの神知識と啓示理解の枠組みの中で聖書をどのように取り扱い、解釈したかによる…」、この一点に起因した（212 頁）。

本博士論文の評価と問題点ないし改善点

(1) 論文の構成について

i) 既述のように、「第一部 グレゴリオスの生涯とその時代」の頁数は75頁である。この分量は218頁の論考本文全体の34パーセント、約三分の一強に達していて、他の章と比較して余りに長大である。加えて、その第一部・第1章は「アレオス論争通史」で始まり、第2、第3章は別テーマ、第4章で再び「アレオス論争研究史」へ回帰する。図式化すれば、第1章「アレオス論争通史」→第2章「グレゴリオスの生涯」→第3章「グレゴリオスの著作」→第4章「アレオス論争研究史」→第5章「ナジアンゾスのグレゴリオス研究史」と続き、各章のテーマ的前後関連が必然性乏しく配置された印象が強い。そのため、「第一部」の各章トピック別の合理的関連性が弱いまま、「第二部」以下の諸章との関連も弱められる危険が垣間見られる。むしろ、第一部の第1章でナジアンゾスの「グレゴリオスの生涯」→第2章で「グレゴリオスの著作」→第3章で「ナジアンゾスのグレゴリオス研究史」→第4章で「アレオス論争通史」（とグレゴリオスの論争関与）→第5章で「アレオス論争研究史」と配置換えをし、さらに各章の頁分量を短めにした方が、各章のトピックの合理的関連性が明確になったように思われる。

ii) 「第二部 神知識」について、田中氏の見解では、二人の論者は「神は存在する」という問いと「神は何であるか」の問いを区別する。バシレイオスは「神とは何か」を知るために教会の伝統をあげ、グレゴリオスは教会の伝統を通して神を知り、終に神化という思想で神知識の可能性を説いたという（論文10, 130頁）が、説得的な解釈である。

iii) 「第三部 神の啓示」、「第四部 聖書と三一の神」、「第五部 結論」については、分量的にも構成的にも一応説得的な筋道に沿って展開されていて、大きな疑問は感じない。

iv) 但し、本論考の「第四部」「第五部」で提示された結論を読むと以下の結論的感想を抱かざるを得ない。本論考の最初から最後までグレゴリオス神学と、主にバシレイオス神学の比較を通じた神学思想史研究に他ならない。それがなぜ本論文のタイトルが『ナジアンゾスのグレゴリオスにおける聖霊論の基盤と展開の研究』で終わり、この表題の後に『○○○…——カイスレイアのバシレイオスとの比較研究』（案）なる副題を付して、本書の完璧なタイトルに仕上げなかったのか、変わらぬ疑問は残り続ける。

(2) 歴史的観点から

i) ニカリア派の神学に貢献したカッパドキア三教父の中で、バシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスの両者の聖霊理解の違い、すなわち、バシレイオスが聖霊を神的存在と述べるに留めたのに対し、グレゴリオスが聖霊を神であると主張したことは、古くから指摘されてきた。田中氏はこれまでの研究史をもとに、両者の違いの理由を、神知識、啓示理解、聖書論などの違いと結びつけて論じ、体系的な仕方で明らかにした。ここに本論文の大きな貢献があると評価できる。また、特に日本においてカッパドキア教父研究が遅々として進まない状況にある中で、最新の研究を紹介した功績も大きい。

ii) 本研究では、バシレイオスが「秘密の伝統」理論に基づき「聖書と伝統」の二源

泉論に依拠したのに対し、グレゴリオスは「聖書の十全性」を重視した上に「啓示の発展」論と結合して「聖霊は神である」との真理に到達するとしたことが明らかにされている。ただ、しばしば聖霊の神性を証言するとされる聖書箇所、例えば使徒言行録 5:3f. について、グレゴリオス自身も『神学講話』31.30 で触れているが、論文中では取り上げられておらず、またその点についての説明がなされていない。審査の席上、田中氏によって、当時は、聖霊の神性について聖書は沈黙していると理解されていたため、グレゴリオスは数ある聖句に頼るよりもむしろ啓示の発展によって説明したとの理解が示された。その説明自体は十分に説得的であるが、同時に、聖書の十全性の理解との関連で、グレゴリオスの聖句の用い方についても注意を払う必要がある。

iii) 論文の第四部、16章で、「啓示の発展」と「神化」の議論が展開されている。この「神化」について、オリゲネスから受け継いだ遺産であると指摘する研究者もある中で、田中氏は、むしろ同時代人であるアタナシオスとの関連を主張する。アタナシオスの体現するニカイア派の遺産としての神化の概念をグレゴリオスは受け継いだとの主張は大変興味深いものであるが、そう言い切れるかどうかについてはなお議論の余地がある。また、そのように受け継いだ神化の概念を「啓示の発展」と結びつけて考えたと言われるが、その場合、神化は、洗礼を受けた人の神理解が深まった結果として聖霊を神と認識できるという個人的なものなのか、あるいは教会の教理史的な発展という全体的なものなのかという問いが生じる。田中氏によれば、グレゴリオスは、本来個人的な次元で理解されてきた神化を、個人を越えて、教会全体が「啓示の発展」によって、聖霊の理解について段階的に深められる事態と理解したといい、そのこと自体については概ね論証されているが、この啓示の発展という概念の歴史的系譜、即ち、グレゴリオス独自のものであるのかどうかについての考察は尽くされておらず、更なる研究が待たれる。

iv) 論文の18章において本研究の今日的な意義が考察されているが、その後の東方教会の歴史においては、グレゴリオスよりもバシレイオスの「秘密の伝統」の方が受け継がれて行っているように思われる。確かに、「聖書のみ」を掲げるプロテスタント教会にとって、聖書の十全性を主張するグレゴリオスの神学は親和性を有する部分もあるであろう。しかし、グレゴリオス神学の持つ可能性についての評価にあたっては、何故グレゴリオスの神学が受け継がれて行かなかったのかをも丁寧に検討する必要がある。

(3) 組織神学的観点から

i) 本論文は、当時聖書が沈黙していると理解され、同時代の他の教父が明確に語らなかった聖霊の神性について、ナジアンゾスのグレゴリオスが何故主張することができたのか、論理的に明快な説明を提供しており、その点は教義学的にも大変興味深いものである。ただ、議論が聖霊の神性の問題に特化され過ぎるきらいがあり、聖霊の位格性など、聖霊論の他の部分についての言及は少ない。

ii) 本論文でなされる議論は概ね説得的であるが、やや論証に甘さが見られる部分も見受けられる。例えば、第二部第6章で、グレゴリオスが「第一原因」と「原因」を区別し、更にモナルキアを「統一」と理解していることに触れつつ、彼が三位一体の神を

第一原因としていると主張される。しかし、論文内でも指摘されているように、グレゴリオスには、モナルキアを父に適用して、その父の下に位格が統一されると語られる箇所もあり、グレゴリオスが三位一体の神を第一原因と理解していると断言するには、もう少し議論が尽くされる必要があるだろう。

iii) また、神化の集団的発展の理論は、確かに、グレゴリオス以前の教父たちが聖霊の神性について沈黙していたことの説明になるとしても、論理的には、無制限な教理の「発展」を認める可能性を開くことになりかねないものでもある。従って、何が正しい発展で、何が誤りであるのかをどのように判断するのが課題となる。また、何故他の時代ではなくグレゴリオスの時代に聖霊の神性の認識が可能になったのかについても、説得的な説明はなされていない。本論文において、このような、グレゴリオスの神学がなお抱える課題について、部分的に認識され、その指摘や考察がなされている点は評価できる。しかし、記述は最小限に留まっており、なお研究の余地が残されている。

iv) さらに、神化による神認識について、その神認識が終末に完成すると田中氏は論じるが、グレゴリオスがどのような終末理解を持っていたのかは本論文では明らかにされていない。グレゴリオスの神学について、全容解明に向けた更なる取り組みが待たれる。

(4) その他

本研究の遂行にあたり、代表的な先行研究とその学説は概ね網羅されており、そういった先行研究の上に自らの研究を位置づけるなどの田中氏の学問的姿勢は大いに評価される。ただ、先行研究を網羅し尽くしているとはまでは言えない。

以上、様々な課題も指摘され得るが、それらが本研究の学問的評価を覆すとはまでは言えず、本研究が博士論文として十分な学術的水準に達し、学問的価値を有するとの評価は変わらない。主査、副査 1、2 の諸氏を含めた諸批判と助言に今後とも田中氏が耳を傾け、この研究分野において更なる学問的成長と活躍に努められることが期待されている。

審査当日の田中氏と提出された博士論文をめぐる論議、質疑その他の内容を踏まえ、招集された審査委員会は、合議の末、田中氏の本論文を学校法人東京神学大学博士（神学）論文として合格判定をくださった。

2021年12月8日